

3つの出会い

雨宮由紀枝（大学教員）

初めて踏み入れた講義室は、何とも言えないエネルギーに満ちた暖かい空間でした。

「えにし」の生み出すパワーでしょうか。

「共通点は？」という2つのクイズのときにマイクを向けられて、トンチンカンな答えをしてしまいました、お話を伺って「うんうん」と頷くことばかりでした。

クイズの「その2」では、星子ちゃんのお父さま、勝村久司さんが医療事故を考える会合で話された言葉、初めて精神科病棟に踏み入れたときの衝撃や現在の認知症病棟の姿も思い出し、知っているのに発信しきれていない自分を深く反省した初回の講義でした。

はじめまして。雨宮由紀枝（あめみや ゆきえ）と申します。同じ「ゆきさん」で、なんだか嬉しく、さらに「ゆきえにし」には、私の名前の3文字が入っているので、ひとりでニンマリしております。

ゆきさんとの初めての出会いは、朝日新聞の社説です。世界各国が知的障害者施設をどんどん減らしているのに、ただひとり日本だけ作り続けているという、あのグラフ。今でもくっきりと目に焼き付いています。

日本のアブノーマルさとともに、署名欄の「大熊由紀子」もしっかりインプット。わかりやすい文章、そして何より、障害のある方々に対する暖かい眼差しを感じました。

30代半ばで子育て真っ盛りの専業主婦から大学院生になり、福祉分野の教員となった駆け出しの頃でしたが、「ノーマライゼーション」や「脱施設化」についての授業で、社説のコピーを随分使わせていただきました。

2回目の出会いは、全国自立生活センター協議会が主催したシンポジウムのときです。

新たなミレニアムの幕開け前後のことですが、私はそこで事務係&小間使いをしていました。「志の縁結び係&小間使い&小間使い」をパクってすみません。でも、本当に小間使いで、シンポジストとして招かれたゆきさんを控室までご案内し、お飲み物も準備した記憶がございます。

何故、障害当事者の設立した自立生活センターに足しげく出入りしていたかと言いますと…問題の真髄を鋭く突いてくる彼らの主張に目を見張り、すぐそばで声を聴きたいと願ったからです。当事者のもつ偉大な力を認識した経験でもありました。

「自立とは、人が主体的・自己決定的に生きることを意味する」という、新たな自立の概念があまり受け入れられなかった頃から、いち早くキャッチして発信してくださったのも、ゆきさんですね。

3回目の出会いは、2011年の「せたがや福祉区民学会」。

懇親会場でお見かけしました。周囲がパッと明るくなるような鮮やかなお洋服と笑顔が印象的でした。あ、もしかしたら、お母さまのお洋服だったのでしょ（笑）。確か、ゆきさんは石井哲夫さんとグラスを傾けながら談笑されていたような…。

私は世田谷区内の大学に勤務しておりまして、区民でもありますので、地域の会合に顔を出したり学生たちにボランティア活動を紹介したり、ちょっぴりではありますが、地域活動にも携わっております。

最後に今回の受講のきっかけをお伝えいたします。昨年の秋に、ゆきさんの講座を受講していた保健師の友人から、「面白いから是非一緒に」とお誘いがありました。プログラムを拝見して、すぐにでも飛んで行きたかったのですが、日程調整ができず、この春からの参加となりました。当の友人はターミナルケアの仕事に携わるため故郷の秋田に赴任し、残念ながら一緒には来られませんが、今度は私から報告することとします。

発信力と戦略を身に着け、社会を変えていく一人となれるよう、「牛の歩み」ですが学び続けたいと思います。